

長安一片月

ちょうあんいっぺん つき
長安一片の月

とうしせん
（『唐詩選』）



はや、十一月も半ばとなりました。

今回の禅語は、盛唐の詩人、李白（701-762）の名詩『子夜呉歌』からです。『子夜呉歌』とは、もともとは東晋の時代、子夜という女性が哀切な曲調の歌を詠んだものがはじまりとされ、長江の下流、呉の国に流行した歌の形式で、「楽府題」の一つに分類されます。李白は、素朴で素直な心を映し出した古い「民謡」の形式を借りてこの詩を作っています。

長安一片月
萬戸擣衣聲
秋風吹不盡
總是玉關情
何日平胡虜
良人罷遠征

ちょうあんいっぺん つき
長安一片の月
ばん ころも う こえ
萬戸衣を擣つ声
しゅうかせ ふ つ
秋風吹いて尽きず
そう ぎよくかん じょう
総にこれ玉関の情
いず ひ こりよ たい
何れの日か胡虜を平らげ
りょうじんえんせい や
良人遠征を罷めん

唐の都、長安の夜空に、一片の月がかかっています...

そして、都の路地のあちらこちらからは、砧を打つ音がせわしく聞こえてきます。

季節は、晩秋から初冬... 冬に備えて、砧で着物を叩いて艶を出し、冬の寒さに備えるのでしょうか。活気に満ちた砧の音は、平穏な日常の営みがあることをわたしたちに告げてくれるのです...

賑やかな砧の音は、戸外に絶え間なく吹き抜ける冷たい秋の風と、澄みきった夜空に皎皎と輝く純白の月と相俟って、遙か遠方の地、玉門関で兵役に従事する夫への思慕をひたすらかき立てます。

玉関の情... 玉門関は、長安の北西3600里（約2000キロメー

トル)といますから、これといった交通手段のなかった唐の時代においては、気の遠くなるほど遠い場所です。男たちは、侵入を繰り返す異民族の討伐のために、遙か彼方のこの玉門関へと、危険な遠征に駆り出されるのです...

大切な人、愛する夫も、冷たいこの秋風に吹かれながら、一人この澄みきった夜空にかかる一片の月を見上げているのでしょうか...

寒くはないでしょうか...寂しくはないでしょうか...健康で、元気でやっているのでしょうか...

ああ...争う敵を平定して戦が終わり、愛する夫が無事に帰ってくる日は、いつになることでしょうか...一人寂しく砧を打つ手も、覚えずとまりがちになるのです...

しかし、こうした果てしない思慕、限りない思いは、何も一人だけのものではないのです。いうまでもなく、同じように、遙か彼方の危険に身をさらす夫や父、子供たちに思いを馳せる女性は大勢いたのですから...都の路地のあちらこちらからいっせいに聞こえてくる賑やかな砧の音は、一人一人の、一打ち一打ちの、さまざまな思い、さまざまな願い、喜びと悲しみ、祈りを運んでいるのです。

長安一片の月...

わたしたちの思い、願い、祈り...悲喜こもごもの思いをよそに、都の夜空には真っ白な一片の月がかかります...何も語らず、何も求めず、何も訴えません...ただ静かに、変わることなく、澄みきった光を投げかける...そしてその光は、都の家々をくまなく、分け隔てなく照らし出すのです。

愛する人を思い、気遣い、その無事を願い、平安を祈る...ひたすらに心を尽くし、一心に...そのひたすらな一途さこそが、無心に光を放つ、澄みきった月にふさわしい...ひたむきに心を尽くすその先に、無心の光は輝く...そう、無心への道は、ひたむきさからはじまるのです。

